

丈夫なイネ・うまいコメづくりの総仕上げ

— 重点事項 —

登熟期間の高温に対応した管理の徹底により 高品質・良食味米に仕上げましょう！

- 1 飽水管理で胴割粒や未熟粒等の発生を防止！
- 2 収穫作業計画の早期確認と機械・施設の早期点検！
- 3 籾の黄化割合を確認し適期収穫の実施！（刈り遅れ防止）
- 4 籾混入等の防止を徹底！（適正な調製）

1 飽水管理で稲体の活力維持 ～早期落水の防止～

- (1) 出穂後25日間は飽水管理を行い、登熟後半まで根の活力を維持する。
 （登熟期に土壤水分が不足すると、乳心白粒、基部未熟粒、胴割れ粒が増加する）
- (2) 早期に落水すると、下葉の枯れ上がりや倒伏が助長されるので厳禁。
- (3) 高温やフェーン発生が予想された時は、稔実障害を防止するため速やかにかん水する。
- (4) 出穂後 25 日以降も可能な限り遅くまでかん水に努める。特にコシヒカリについては、最終取水日に湛水して稲の活力維持を図る。

2 主な品種の出穂期と収穫時期のめやす（8月8日現在）

- (1) 収穫適期は黄化籾割合が 85～90%になった頃である。
- (2) 出穂期後の積算温度から推定した収穫適期は、以下のとおりである。

品種名	出穂期	収穫時の積算気温	収穫適期見込み
ゆきん子舞	7月24日	975℃	8月31日
こしいぶき	7月25日		9月1日
こがねもち	7月30日	1,000℃	9月8日
コシヒカリ(5/5 植)	8月5日		9月15日
コシヒカリ(5/10 植)	8月6日		9月16日
新之助(5月中旬植)	8月12日	1,050℃	9月26日

※ 収穫適期見込みは、出穂期からの日平均気温（新津アメダスデータ）の積算による予想日。

※ 出穂期翌日～8月7日は本年実測の気温、8月8日以降は平年気温を積算した。

※ 出穂期は管内の平均値であり、地域やほ場によって異なるので注意する。

3 刈取り前の準備

- (1) 種子混入のおそれのあるクサネム等の雑草は事前に抜き取る。
- (2) 刈取り予定の1週間前までに作業場の清掃を行い、コンバインや乾燥機、調製機械等の点検や整備も早めに行う。

4 収穫時の留意点 ～収穫適期は黄化籾割合が85～90%～

- (1) ほ場毎に黄化籾割合を確認し、刈遅れを防止する。
- (2) 肥沃地や多肥栽培では、茎葉や穂軸は青くても籾は成熟している場合がある。一方で、やせ地等では茎葉や穂軸が黄化していても籾は熟していない場合があるので、茎葉や穂軸の色で判断せず、必ず籾の黄化程度を確認して収穫適期（黄化籾割合85～90%）を判断する。
- (3) 高温年は籾水分の低下が早く、胴割れの発生が懸念されるため、刈取適期より2日程度早めに刈り取る。

5 適正な乾燥 ～ゆっくり乾燥で胴割れ防止～

- (1) 生籾は収穫後なるべく早く乾燥機に張り込み、通風して変質を防止する。
- (2) 初期の籾水分が高い場合は、送風温度を低めに設定する。
(初期水分28%の場合は乾燥温度を40℃以下、24%の場合は50℃以下に設定)
- (3) フェーン時に収穫した籾は胴割れを起こす危険性が高いため、最初の数時間は常温で通風乾燥を行い、胴割粒の発生を防止する。
- (4) 仕上げ水分は15%とする。

6 適正な調製 ～人的な格落ち（籾混入、肌ずれ等）の防止～

- (1) 籾すりは、肌ずれ防止のため、籾の温度が常温近くまで下がってから行う。
- (2) 「籾の混入」等を防止するため、事前にゴムロール間隔を0.8～1.2mm（脱ぶ率80～85%）に調節する。また、調製前にはゴムロールの摩耗状態を確認する。
- (3) ふるい目は1.85mm以上を用い、流量調節を適正にしてくず米を完全に除去する。未熟粒や被害粒が多い場合には、必要に応じて1.90mmのふるい目や色彩選別機を活用して整粒歩合を高める。

7 墨黒穂病・稲こうじ病被害粒の混入防止対策

- (1) 前年の発生ほ場を中心に発生状況を確認する。
- (2) 発生したほ場では混入防止のため、稲が十分に乾燥している条件下で刈取る。
- (3) 収穫・乾燥・調製作業は、発生のないほ場と別に行う。
- (4) 被害を助長する肌ずれを防止するため、籾の水分調整、籾摺機のロール間隔調整等を適切に行う。
- (5) 2番口の籾（稲こうじ粒を多く含む場合あり）は籾摺機に戻さない。
- (6) 稲こうじ粒発生の場合、粗選機等を使用し、可能な限り除去する。

★熱中症対策・事故防止★

- 作業中はこまめな水分補給と休息をこころがけ、熱中症を予防する。
- 農作業事故防止に努める。